

■ 作品タイトル

「幕末地球防衛軍」

■ 作・うちやまきよつぐ

1. 本能寺の変が変

1582年．天正10年6月2日。

京都。本能寺。

燃えさかる本能寺。

織田信長(49)と明智光秀(67)が刃(やいば)を手に対峙している。

信長「(光秀に、)この老いぼれがあッ!!

汝(うぬ)が如き老いぼれに、この第六天魔王、織田信長が倒せるか!？」

光秀「誰かが討たねばなりません。戦国の世を終わらせ、天下太平の世を創るためにッ!! ならばこの明智日向守光秀が、永きにわたった戦乱末世、終わらせて見せましようッ!!」

信長「問答無用ッ!! この国は儂のもんじゃあッ!!」

ト、斬り掛かる。

躲す光秀。

切結ぶ信長と光秀。

ストップモーション。

案内人に現れて、

案内人「その日は星の降るような夜だった。

1582年。天正10年6月2日。京都、本能寺。明智光秀の謀反により織田信長は天下統一を目前にしながらか歴史の表舞台からその姿を消した。信長の遺体が見つからなかったコト。謀反の理由が明白になっていないコト。その後、光秀を討伐した羽柴秀吉のいわゆる中国大返しと呼ばれる行動があまりにも迅速すぎたコト。本能寺の変は多くの謎に包まれている…」

信長と光秀の激闘が再び始まる。

カキーン、カキーン、

森蘭丸現れて、

蘭丸「(信長に、)上様ッ!!」

信長「(蘭丸に、)どうした、蘭丸!？」

蘭丸、天空を指差して、

蘭丸「星が…」

信長「(蘭丸に、)星が、どうした!？」

蘭丸「星が、降って参ります…」

信長「何ィ!？」

ト、蘭丸が指差す天空を見る。

光秀「(も、見る)!？」

信長「!？ 真(まこと)、星が降って来る…」

一瞬後、巨大な隕石が落下する。

爆発、炎上する、本能寺。

燃えさかる本能寺の中に、場面転換。

## 2. 土佐の郷士(竜馬ト以蔵)

案内人現れて、

案内人「時は移って、1852年。嘉永5年。土佐藩は他藩よりも厳しい、独特の身分制度を備えた藩であった。関ヶ原での恩賞により、遠く遠州掛川藩五万石の山内一豊が土佐二十四万石に入国し、国主となった。この山内氏と、その連れて来た家臣の子孫たちが上士であり、関ヶ原で滅亡した地元土佐、長宗我部氏の遺臣たちの子孫が郷士。上士は、この残存旧勢力を厳しい差別で押さえつけて来た。藩の職制は上士のみ、郷士はこれにひれ伏すしかなかった。さらに、差別は職制上だけにとどまらず、郷士は冬でも絹や紬の類いを着てはならない。夏のカンカン照りでも日傘をさしてはならない。雨の日も下駄をはいてはならないなど、屈辱的な差別を押しつけられてきた…」

雨の中、傘を手にした坂本竜馬(17)、岡田以蔵(17)、望月亀弥太(もちづききやた)(14)がやって来る。

以蔵「くそッ!! まっこと、納得いかんのう。

上士に生まれりゃあ、バカでも剣が使えるでも、俺たちよりはるか上から威張りよる。

上士ども俺たちを人間だと思っちょらん…」

道の反対側から上士たちがやって来る。

以蔵、気が付いて、

以蔵「! 上士じゃ…」

亀弥太「竜馬さん、どうする？」

竜馬「……………」

竜馬、以蔵、亀弥太、上士三人と対峙する。

上士壱「（竜馬たちに、）どかんかい。郷士の犬ども。上士様のお通りじゃ、傘をとって礼をせんかい」

竜馬・以蔵・亀弥太「……………」

上士弐「（竜馬たちに、）どうした？」

竜馬、道を開ける。

以蔵、亀弥太も竜馬に倣う。

上士参「（竜馬たちに、）傘は？」

以蔵「（上士参に、）道は開けたンじゃ、充分じゃろ!! さっさと通れッ!!」

上士参「（以蔵に、）何ィ」

亀弥太「以蔵さん…」

以蔵「亀弥太は黙ってるッ!!」

上士弐「（以蔵に、）おんし、斬り殺されたいんか!？」

上士壱「（以蔵に、）上士は、郷士を斬り殺してもおとがめなしじゃぞ!!」

以蔵「（悔しいが、）……………」

亀弥太「……………」

竜馬「（以蔵に、）以蔵、やめよう」

以蔵「えっ!？」

竜馬「（上士たちに、）すまん。どうもわしらは動作が遅いぜよ」

ト、傘を閉じる。

慌てて、続く、亀弥太。

やがて、以蔵もそれに倣うが、閉じた傘の水を切る時に、ワザとその水を上士たちに掛ける。

以蔵、ビュッ!!

上士たちに水が掛かる。

上士たち「うッ!!」

以蔵「（上士たちに、）あ、こりゃ失礼」

上士参「（抜刀して、以蔵に、）おのれ!!

そこへなおれ、たたっ斬ってくれるわ!!」

以蔵、素早く、刀に手を掛ける。

上士参、それを見て、

上士参「（以蔵に、）おっ!! 上士に対して  
刀に手を掛けたな!!」

上士壱「これで堂々とたたっ斬れるぜよ」

亀弥太「以蔵さんッ!!（謝った方がええ）」

ト、竜馬、以蔵の後ろ首に手刀。

以蔵、気を失って、倒れそうになる。

竜馬、それを腰から支えて、ゆっくり  
と地面へ。

上士たち「（驚いて）えッ!？」

竜馬、以蔵の前に回り込み、以蔵を守  
るようにして、坐り、

竜馬「（上士たちに、）ワシを気のすむまで  
殴って、勘弁してくれンかの」

上士参「何ィ!？」

竜馬「……………」

上士壱「（竜馬の顔に気が付いて、）! おま  
ん、才谷屋の、あの次男坊じゃな」

上士弐「（上士壱に、）何!? あの殿に斬り  
付けたっちゅう…」

竜馬「（上士たちに、）ご存知でしたか…」

上士壱「後藤や乾からも聞いちよるわ。金で  
郷土株を買った、いやしい商人ふぜいのく  
せにッ!!」

竜馬「!」

ト、立ち上がり、

上士壱「（ビクッとして、弐と参に、）やれ  
いッ!!」

上士弐・参「おうッ!!」

ト、脱いだ高下駄、持っていた傘など  
で竜馬をボコボコにする。

上士たちの、「ベコノカワーッ!!（こ  
のバカヤロー）」「身の程知らずッ!!」

「このやろうッ!!」などの怒声。

バキッ、ゴボッ、ズガッ…。

竜馬、ただ黙って殴られている。

竜馬「……………」

上士壱「なんだ、なんで倒れン…」

竜馬「……………」

上士壱、とどめの一撃のつもりで、

上士壱「ウオオオオオッ!!」

拳が竜馬の顔面にヒットするが、竜馬は倒れない。

上士壺、その勢いに、足を滑らせて、  
上士壺「うわッ…」

ト、転倒してしまう。

上士壺、振り返り、竜馬を見る。

竜馬、圧倒的な迫力で上士壺を見詰めている。

竜馬「……………」

上士壺「（恐ろしくなって、忒と参に、）ケッ！  
こんな郷士どものために、俺たちが濡れるコトはないがよ…」

上士忒「（弱々しく、）おう…」

上士参「（壺と忒に、）行くぜよ！」

上士壺・忒「（竜馬に、）こんベコノカワ!!」

ト、立ち去る、上士たち。

竜馬、しばしそれを見送り、やがて、  
以蔵に活を入れる。

以蔵、気が付いて、

以蔵「（竜馬の顔を見て、）その顔は…」

竜馬「これですんだきに…」

以蔵「竜馬…」

ト、突然、泣き出して、

以蔵「ちくしょう…ちくしょう…悔しいぜよ、  
竜馬…」

竜馬「以蔵、」

以蔵「？」

竜馬「亀弥太も、」

亀弥太「？」

竜馬「意地は、もっと大きなコトに張ろうぜ  
よ!!」

以蔵「竜馬…」

亀弥太「竜馬さん…」

ト、二人、竜馬に抱き付き、号泣。

以蔵「（悔し泣き）ウワワワワッ!!」

亀弥太「ウワワワワッ!!」

竜馬「…どうしたらえいがやろう…どうしたら？」

場面転換。

### 3. 天然理心流（総司ト歳三）

案内人、現れて、

案内人「時と場所はまたまた移りまして、  
1863年。文久3年。江戸は武蔵国多摩郡辺り。  
この頃、江戸や京に浪人者が溢れ、その数、  
数万あまりを数えるとも云われてました」

河原。

土方歳三(29)が大勢の浪人者たちと大立ち回り。

が、手にしているのは、何れも竹刀である。

多勢に無勢。

歳三、危機一髪！

その時、沖田総司(19)現れて、

総司「待て、待て！ 天然理心流、沖田総司!!」

歳三「（総司に、）遅いぞ、総司ッ!!」

総司「すいません。寝坊しちゃいまして、」

歳三「いいから、何とかしろ！」

総司「ハイ。ウオオオオオッ!!」

ト、竹刀を手に突っ込んで行く。

総司、歳三対浪人たちの大立ち回り。

やがて、逃げ去る、浪人たち。

時間経過。

河原に座り込んでいる、総司と歳三。

歳三、石田散薬を呑みながら、

歳三「それにしてもいまましい奴らだ」

総司「効くんですか？ 石田散薬」

歳三「土方家家伝の妙薬だ。何にでも効く」

総司「何にでも？」

歳三「呑むか？」

総司「ボクは金平糖の方が」

歳三「いつまでも子供だな」

ト、懐から金平糖の包みを出して、総司に勧める。

歳三「ホラ」

総司「（貰って、）ありがとうございます」

ト、食べ始める。

歳三「アイツら始めからケンカ売るつもりで  
人数集めてやがった」

総司「仕方ないですよ。天然理心流が乗り込  
むまでは、ココらは、奴らの縄張りだった  
ンですから。生活が掛かってますから」

歳三「コッチだって生活が掛かっている。近藤  
のかっちゃんとおれと総司が江戸から出向  
いてやっと広げた縄張りだ。出稽古の度に  
野良喧嘩じゃやりきれねえ。そろそろケリ  
を付けにやな」

総司「ハイ」

歳三「総司。アイツら、絶対に待ち伏せてや  
がるぜ」

総司「？」

場面転換。

■橋のたもと。

総司、歳三。

総司「歳さんの云う通りだ。待ち伏せの場所  
がどうしてこの橋だって分かったンです？」

歳三「待ち伏せる身になって考えりゃあ、勘  
所はすぐ分かる。奴ら斬る気だぜ。オメエ  
の刀、斬れるだろうな？」

総司「さあ、人を斬ったコトありませんから」

歳三「機先を制して突っ走るだけだ。手順は  
呑み込んだか？」

総司「（頷く）ハイ」

歳三「頼んだぜ」

ト、川を横切って、橋の反対側へ。

総司、それを見守る。

やがて、橋の反対側から、歳三の絶叫  
が聞こえて来る。

歳三「ギャアアアアッ!!」

ト、橋の反対側からこちら側（総司の  
居る方）へと斬り進んで来る。

橋の上の浪人たち、歳三に向かって行  
く。

その背後に総司現れて、

総司「天然理心流、沖田総司ッ!!」

ト、浪人たちの群れに突っ込んで行く。

激しい斬り合い。

やがて、総司、歳三、全員を斬り倒す。

歳三「行くぞ、総司!!」

総司「ハイ」

二人、脱兎の如く駆け出す。

場面転換。

#### ■河原。

総司、歳三。

総司「これからどうするンです？」

歳三「將軍様が天皇様に会うために京へ上られるらしいが、京では、過激派浪士が將軍様を暗殺しようと手ぐすね引いて待ってる。だから將軍様をお守りするために幕府は浪士隊を作るコトになった」

総司「ハイ」

歳三「浪士隊は京へ上って過激派浪士を壊滅させる。浪士隊に参加すれば、劍の腕で幕府に雇われるってコトだ。…オレは京へ行くと思う」

総司「京へ…」

歳三「名もないイモ道場とバカにされ続けてきたが、腕だけはその辺のお飾りで刀持ってる侍なんかには負けやしねえ。このままあの小さい道場で一生を終わるより、これを機会に幕府に雇われれば、正真正銘の侍になれるンだ。旗本にだってなれるンだぜ」

総司「旗本!？」

歳三「どうする、歳？」

総司「えッ？」

歳三「って、かっちゃんに聞かれたよ」

総司「近藤さんに？」

歳三「総司はどう思う？」

総司「歳さんが行くならボクも行きます!!」

歳三「そうか。一緒に本物の武士になるか」

総司「本物の武士？」

歳三「でも、まあ、行きゃあ、とにかくメシが食える！」

総司「あ、そっちが本音ですね」

歳三「かっちゃんには云うなよ」

総司「ハイ」

歳三「そうだ。京都に行こう!!」

音楽カットイン。

「私のお気に入り」

音楽の中に場面転換。

#### 4. 菊一文字くん

京都。

橋のたもとでビラ配りしている、竜馬(28)、以蔵(28)、亀弥太(25)。

竜馬「さあ、みんなで入ろう海軍操練所!!」

身分はいっさい問わない上に、黒船の操術が学べて、オマケに航海士の資格が取れる。

まさに、この乱世にピッタリ海軍操練所!!」

亀弥太「(竜馬に、)竜馬さん、そんな大声出して恥ずかしくないんですか？」

竜馬「亀弥太。何を云いゆうが。恥ずかしいなんてコトあるかい。(さらに大声で、)

そこの浪人さん、これからは海軍操練所で資格を取れば、士官するにも絶対有利じゃ。

さあ、入ろう、海軍操練所!!」

以蔵「(新選組を見付けて、)!! 竜馬、新撰組じゃ」

亀弥太「(竜馬に、)浪人は斬られます!!」

逃げましょう!! 隠れましょう!!」

ト、後ずさり。

総司、歳三、やって来て、

歳三「(竜馬に、)我らは新選組。市中見回り中である。役目によって尋ねる。お手前の藩命と姓名を伺いたい」

竜馬「(ニッコリして、)ニッポン人、坂本竜馬じゃ。おんしらあ、神戸の海軍操練所に入らんか? これからは剣より海の時代じゃぞ。攘夷をするには剣より軍艦。国を豊にするには、世界の海に出て外貨を稼ぐコト。ニッポンを救うのも剣より海軍ちゅうコトじゃ。詳しいコトはコレに書いてあるきに、ホレ、よく読んでくれ」

ト、総司にビラを渡す。

総司、それを受け取って、

総司「（ビラを見ながら、）海軍ですか…？」  
亀弥太「（それを見て、以蔵に、）以蔵さん、  
まずいですよ…」  
以蔵「うん…」  
歳三「何をワケの分からぬコトを云っておる。  
お手前は、勤王派か？ 佐幕派か？」  
竜馬「海軍派じゃ!!」  
歳三「何ィ!? おのれ愚弄するか。京の治安  
を乱す浪士は斬り捨てるぞ!! 総司!!」  
総司「ハイ。斬りますか？」  
ト、抜刀して、  
総司「菊一文字、お相手いたす!!」  
竜馬「ワシや斬り合いは好かんき、菊一文字  
くん、やめちょこ」  
総司「菊一文字は、この刀の名。ボクは、沖  
田総司と云います!!」  
竜馬「まいったのう…」  
総司「（竜馬に、）行きますッ!!」  
ト、三段突き。  
竜馬、その攻撃を見事に躲す。  
総司、突然、刀を収める。  
歳三「（総司に、）どうした総司？ 何故や  
める？」  
総司「（感心して、）いやあ見事だなあ!!  
ボクの三段突きがこうも見事に躲されたの  
は、初めてですよ」  
竜馬「そうか。なら、もう、やめちょこ」  
以蔵ト亀弥太に、  
竜馬「帰るぜよ」  
ト、行ってしまふ。  
以蔵・亀弥太「（慌てて、）ハイ」  
ト、竜馬に続く。  
歳三「なんだアイツは!？」  
総司「ニッポン人、坂本竜馬ですって…」  
歳三「……………」  
場面転換。

## 5. 池田屋騒動

1864年。元治元年。6月5日20時頃。  
京都。池田屋。その一室。

吉田稔麿（よしだとしまろ）(24) が望月亀弥太を一同に紹介している。

稔麿「えー、長州の吉田稔麿です。諸君。改めて、新しく加わってくれた同志を紹介します。土佐の望月亀弥太くんです。この度の義挙に加わって下さるに際し、神戸海軍から多量の火薬類を手土産に持参して下さいました!!」

志士たちの、

「おおッ!!」

「それはありがたし!!」

「神戸海軍から来て下さったか!!」

「ありがたい、同志よ!!」

「一緒にやりましょう!!」

などの声。

亀弥太「（一同に、）望月亀弥太です。私たちの土佐勤王党党首、武市半平太先生は今、土佐で牢獄生活を強いられております。武市先生を救う道はただ一つ!! この計画を成功させ、京を再び長州藩を中心とした、勤王の天下に戻すコトであります!! そして、それが、倒幕への道!! 日本を救う道であります!! そのコトの為に戦って華々しく死ねるならば…志士になって、無上の喜びであります!! 」

ト、感激して泣き出す。

志士たちの、

「その通り!!」

「そうだ!!」

「共に戦おうぞ、望月くん!!」

などの声。

亀弥太「（独り言）竜馬さんも分かってくれますよね。許してくれますよね。喜んでくれますよね!!」

場面転換。

#### ■新選組。壬生屯所。

総司、歳三。

歳三「総司。長州の吉田稔麿ら、浪士どもは近々、風の強い夜を選んで御所の風上から

火を放ち、火事に驚いて参内する公卿たちを捕らえて人質にし、警備に駆け付けるであろう守護職松平容保（かたもり）侯を襲って殺そうって計画らしいぜ…」

総司「それじゃあまるで、叛乱じゃないですか」

歳三「そればかりじゃねえ。火事の混乱に乗じて宮中へ押し入り、天皇を奪い、長州へ動座して攘夷倒幕の兵を起こそうって筋書きらしい…」

総司「京の街を焼くなんて…。なんて野蛮で恐ろしいコトを考えるンでしょう!! 許せません!! 一気に襲って捕らえましょう!!」

歳三「襲うって云っても、新選組は、今、食あたりと夏バテでみんな寝込んでいて、動ける者は三十人ちょっと、それを四国屋と池田屋、二手に分けるとなると…」

総司「ボクは一人でも行きます!! 例え相手が何十人居ても、例えどんな不利な条件でも、こんな大それた悪事を見逃すなんて、男に生まれた意味がなくなるッ!!」

歳三「総司…」

総司「歳さんッ!!」

歳三「ヨシッ!! 総司、戦闘準備だッ!!」

総司「ハイッ!!」

場面転換。

## ■ 池田屋

総司、やって来て、池田屋主人に、

総司「御用改めである」

主人「（慌てて、二階に、）お二階のお客さま方、御用改めでございますッ!!」

総司、その主人の後ろ首に手刀。

気を失う主人。

土佐浪士、北添侘磨（きたぞえきつま）二階に現れて、

北添「（少し、酔いながら、）亭主、何か云うたがか？」

総司、階段を脱兎の如く駆け上がり、

北添を大上段から袈裟斬り。

北添、たまらず階段から転げ落ちる。

ダダダダダーッ!!

物音に驚いた浪士たちが部屋から飛び出して来る。

総司、一瞬にして浪士たちを斬り倒す。

浪士一「新選組だッ!!」

浪士二「逃げろ皆!! ここは命の捨て場じゃなかばい!! 命は来たるべき義挙で捨つるばい!!」

浪士三「だめだ!! こっちは格子がはまって、出られん!!」

総司、その三人に、

総司「ここは一人もにがしませんよ」

ト、瞬時に三人を斬り倒す。

総司、去る。

亀弥太、現れて、

亀弥太「あああああ～。竜馬さ～ん。ここで死んじゃ何にもならない。死んでたまるか～」

ト、逃げ去ろうとする。

総司、現れる。

亀弥太「!!」

総司、瞬時の抜き胴。

ザシュッ!!

総司、そのまま去る。

亀弥太、その総司を振り返りながら、ゆっくりと腰から崩れ落ちる。

亀弥太「……………」

亀弥太、斬られた箇所を確認して、

亀弥太「ああ～。し、死んでたまるか～。死にたくないぜよ～。まだ、なんも大働きをしてないがぜよ～。ああ～。(大声で、) 竜馬さ～んッ!!」

総司、その声に気が付いて、戻って来て、

総司「(亀弥太に、) アナタは土佐の方です

か？ 神戸海軍の方なのですか？」

亀弥太「りょ…竜馬さん…」

総司「さ、坂本竜馬さんの…」

その時、総司の背中目掛けて浪士が大上段に斬り掛かる。

その刀を歳三の刀が跳ね上げる。

カキーンッ!!

次の瞬間、総司の菊一文字が浪士の喉を突く。

ザシュッ!!

総司、突然、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ。

歳三「総司、大丈夫か？」

総司「大丈夫です。ありがとうございます」

歳三「斬られたくなかったら、斬るしかねえ。気にすんな」

総司の足元で絶命している亀弥太。

亀弥太「……………」

総司「……………」

歳三「気を付けろよ」

ト、別の場所へ。

総司「ハイ」

が、突然、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ。

総司、口に手をやる。

手が血に染まっている。

総司「!？」

場面転換。

#### ■ 走る竜馬ト以蔵

全力疾走する竜馬ト以蔵。

竜馬「亀弥太ーッ!!」

以蔵「亀弥太ーッ!!」

場面転換。

#### ■ 池田屋前

亀弥太の遺体を前に総司ト歳三。

竜馬ト以蔵、やって来て、

竜馬、亀弥太の遺体に気が付いて、

竜馬「亀弥太…」

ト、亀弥太の遺体を抱きかかえようとするト、

歳三「コラッ!! 触るな!! 遺体改めがまだ  
済んでない!!」

竜馬「(歳三に、)命をとったンじゃ、もう  
それで充分じゃろう!!」

ト、亀弥太の遺体を抱きかかえようと  
する。

歳三「坂本竜馬。オマエのしているコトは、  
オマエもこの暴徒どもの一団だと云ってる  
ワケだな。だとすれば、容赦せぬぞ!!」

竜馬「容赦せぬじゃと…」

ト、ゆっくり立ち上がり、

竜馬「(歳三に、)斬るちゅうがか土方!!  
抜いてもええぜよ…。この志士らを見ろ!!  
皆、無念じゃ無念じゃと泣いちゅう…」

歳三「……………」

竜馬「やるがか!! 云うちよくがワシは強い  
ぜよ!! おまんだけじゃない、新選組全員、  
ぶった斬るぐらいに大暴れしちやるきの  
う!!」

歳三、刀に手を掛ける。

総司「(歳三に、)やめてください、歳さ  
ん!! やめましょう!! 今はやめましょ  
う!! ここは引き取らせてあげましょ  
う!! ね!! ね!!」

歳三「(竜馬に、)コイツらは京を焼き討ち  
にし、恐れ多くも天子様を奪い去ろうと企  
んだ極悪人どもだ!! 新選組は、正義の名  
のもとにこれを討ち取ったのだ!!」

竜馬「!!」

以蔵「…竜馬」

竜馬「(以蔵に、)…背中に乗せてくれ」

以蔵「うん」

ト、亀弥太の遺体を竜馬の背中に乗せ  
る。

以蔵「竜馬…(大丈夫か?)」

竜馬「(以蔵に、)行こう」

以蔵「うん」

ト、亀弥太の遺体を支えながら、

以蔵「(竜馬に、)亀弥太の奴云うちよった。  
虫けらのように一生を永らえるよりは、お

国のために華々しく死にたいがじゃ。志士として大働きしたいがじゃ。けんど、まだ、何もせぬうちに…」

竜馬「( 亀弥太の遺体に、 ) 亀弥太。斬られて痛かったじゃろう…まだ何もせんうちに殺されて、無念じゃったろう……」

以蔵「竜馬…」

竜馬「じゃが、おまんの魂はワシと共に生き続けるがじゃ!! さあ、しっかりしがみついちよきや!! やっちやるきに見ちよれ!! ワシもまだ無力じゃが、やっちやるき。どこまで、何が出来るか分からんけんど、やっちやるきに、やっちやるきに、ずっと一緒やぞーッ!!」

以蔵「…竜馬」

歳三「……………」

総司「…竜馬さん」

竜馬「やっちやるきにッ!!」

場面転換。

## 6. 勝麟太郎

1865年。慶応元年。( 多分、 ) 夏。

江戸、赤坂、勝麟太郎家の庭。

木刀を手に素振りしている、勝麟太郎(43)。

縁側に腰掛けお茶をすすりながら、その様子を見ている、新門辰五郎(65)。

麟太郎、ポーズを決めて、

麟太郎「( 辰五郎に、 ) どうだ辰つあん、決まってるだろう」

辰五郎「確かに決まってますけどね、素振りばかりじゃ、島田虎之助先生仕込みの腕が泣きますぜ、麟太郎さん」

麟太郎の腕が泣く。

うわーん。

蝉も鳴く。

ミーン、ミーン、ミーン。

麟太郎「夏だなあ…」

辰五郎「( ため息 ) ハフッ」

麟太郎「……………」

辰五郎「池田屋騒動で斬られた志士の中に麟太郎さんのお弟子さんがいたンでしょ」

麟太郎「望月亀弥太。かわいそうなコトをした」

辰五郎「それが原因で神戸海軍操練所閉鎖。

麟太郎さんは免職。知行二千石召し上げて、ドアホが揃ってやがるね、徳川さんも。旦那みてえな人をクビにするなんて。あつしは、もう、悔しくて、悔しくて…」

麟太郎「なあに、とっくの昔に覚悟は出来てたんだ。あとは、若い奴らに任せるよ」

ト、突然の衝撃波。

ドーンッ!!

麟太郎、吹っ飛ぶ。

麟太郎「ウワワワワッ!!」

ト、次の瞬間、辰五郎を振り返り、

麟太郎「辰つあん、大丈夫か!？」

が、そこに辰五郎の姿はない。

麟太郎「…消えた？」

星野源内(?)、現れて、

源内「勝先生!! 勝麟太郎先生!!」

麟太郎「オメエさん、誰でえ？」

源内「星野源、」

麟太郎「(喰って、)星野源!？」

源内「内、と云います」

麟太郎「内? 星野源内!？」

源内「ハイ」

麟太郎「星野源内ねえ…？」

源内「そんなコトより、アレッ!!」

ト、遙か江戸城上空を指差す。

麟太郎「どこでえ？」

源内「江戸城の真上ですよ!!」

麟太郎「江城(こうじょう)の真上だあ…」

ト、麟太郎、それを確認して、

麟太郎「なんだいありゃあ!？」

源内「鉄甲船ですよ、信長の」

麟太郎「信長の鉄甲船!? 信長って、あの、」

源内「ええ、織田信長です」

麟太郎「織田信長!？」

源内「…遂に現れましたねッ!!」

麟太郎「遂に現れましたって、オメエ、あの  
鉄甲船、」

源内「ええ、浮かんでます」

麟太郎「どお云うことでえ？」

源内「だから、空飛ぶ鉄甲船ってコトですよ」

麟太郎「空飛ぶ鉄甲船だあッ!？」

場面転換。

## 7. 信長、再臨

江戸城城内、評定の間。

徳川家茂(19)が、家臣を捜し回っている。

家茂「誰か！ 誰か！ 誰かおらぬか!？」

しかし、シーン。

家茂「誰もおらぬ。どういうことじゃ…」

家茂の目の前に突然、蘇った信長  
(332) がその姿を現す。

家茂「(驚いて、) 誰じゃ!？」

信長「織田信長」

家茂「織田信長!？」

信長「お主こそ誰じゃ？」

家茂「余は、徳川家十四代将軍家茂じゃ!!」

信長「家康の子孫かあ…。十四代も続くとは  
のう…」

家茂「東照神君家康候を呼び捨てにすると  
は!？ 無礼であろう!!」

信長「主みたいな弱そうな奴でも将軍に成れる  
のか。良い時代じゃな」

家茂「無礼者ッ!! 誰か!! 誰か!!」

信長「無駄じゃ」

家茂「どうして？」

信長「儂が全部消したのじゃ」

家茂「消した!？」

信長「別の次元に送り込んだのじゃ。と云っ  
てもお主には何のコトかまるで分かるまい  
が…」

家茂「何を申しておる？」

信長「ともかく、今、この城には、儂とお主  
しかおらんと云うコトじゃ。イヤ、この日  
本には儂とお主しかおらのじゃよ」

家茂「ウソを申すなッ!!」

信長「(構わず、)そこで本題じゃが…」

家茂「ウソを申すなど云っておるではないか!!」

信長「儂に、將軍の座を譲って貰おうか」

家茂「何ィ!？」

信長「期限は三日。三日経ったらまた来る。

それまでにこの儂に將軍の座を譲る旨を文書にしたためておいてもらおう」

家茂「勝手なコトを申すなッ!!」

信長「勝手なのは、儂の十八番(おはこ)じゃ」

家茂「断ったらいかがいたす？」

信長「お主は死ぬまで一人ぼっちじゃ」

家茂「!!」

信長「もう誰も戻っては来ぬ。淋しいぞオ。

それに、この国の民、四千万人はお主が殺したコトになるッ!!」

家茂「何ィ!？」

信長「儂の比叡山より酷いのう」

家茂「…何故、何故、將軍の座を欲しがる？」

信長「夢をもう一度…。この時代で天下を取る!!」

家茂「乱世であるぞ」

信長「望むところよ!!」

家茂「何を云っても無駄な様じゃな…」

信長「その通りじゃ。それじゃあ、三日後に」  
ト、消える。

家茂「!？」

やがて、気を取り直して、

家茂「誰か!! 誰かおらぬか!!」

シーン…。

家茂「(叫ぶ、)誰かあッ!!」

場面転換。

## 8. 星野源内

麟太郎の家。その一室。

麟太郎ト源内。

麟太郎「信長が蘇ったあッ!？」

源内「ハイ」

麟太郎「バカいっちゃいけねえよ。信長は

283年前の天正10年6月2日の本能寺の変  
で自害した筈じゃねえか!!」

源内「その筈だったんですが…」

麟太郎「何でえ？」

源内「その時に、星が降りまして…」

麟太郎「星が降ったあ!？」

源内「ハイ。で、その星ってのが、何て云い  
ますか…」

麟太郎「何て云うンでえ？」

源内「宇宙船て云うンですが…」

麟太郎「宇宙船!？」

源内「ハイ」

麟太郎「何でえ、その宇宙船てのは？」

源内「星から星へ旅する船です」

麟太郎、ポカリと源内のアタマを叩い  
て、

麟太郎「ウソ付くンじゃねえ!!」

源内「だよなあ…。この時代じゃ絶対無理だ  
よなあ…。あ、どうしたら信じてもらえま  
す？」

麟太郎「どおしたらって、オメエ、いくらオ  
イラが咸臨丸でメリケン行ったからって、」

源内「あ、咸臨丸でアメリカ行ったじゃない  
ですか!! でも、昔の人は咸臨丸が出来る  
コトもアメリカがあるコトも想像出来なか  
ったじゃないですか!!」

麟太郎「それじゃあ何かい。いつかはこのニ  
ッポンでも、その宇宙船てのが出来て、他  
の星に旅するコトが出来る日が来るってコ  
トかい？」

源内「ハイ。随分と先のコトだと思いますが  
…」

麟太郎「ウン…」

ト、考え込む。

源内「事実、江戸城の真上に鉄甲船は浮いて  
るでしょ!!」

麟太郎、立ち上がり、江戸城の真上の  
鉄甲船を確認して、

麟太郎「ウン…確かに浮いてるけどよォ…」

源内「それに、麟太郎さんの目の前で辰五郎

さんが消えたでしょ!!」

麟太郎「あ、あれほどお云う仕掛でえ？」

源内「ああ、余計なコト云ったあ!!」

麟太郎「余計なコトって何でえ？」

源内「イヤ、もっと説明が難しいンですよ」

麟太郎「オイラには理解出来ないってコトかい？」

源内「麟太郎さんだったら、理解出来ると思いますけど…」

麟太郎「けど、何でえ？」

源内「(仕方なく、)パラレルワールド。並行世界って云うンですけど、(思い付いて)あ、魔界!!」

麟太郎「魔界!？」

源内「辰五郎さん、信長の妖術で魔界に送られちゃたんですッ!!」

麟太郎「魔界かあ…。信長さん、自分でも第六天魔王って云ってるしなあ…」

源内「信じてくれました!？」

麟太郎「信じちゃいねえよ。でも、信じなきゃ話が前に進まねえだろ」

源内「そうナンです。ここは一つ私を信じて」

麟太郎「まあ、悪い奴じゃなさそうだし、オメエさんのコト信じて、オメエさんの話も信じるよ」

源内「さすが、勝麟太郎大先生(おおせんせい)!!」

麟太郎「世辞は後でいいから話を進めてくんな」

源内「ハイ。で、どこまで話しましたっけ？」

麟太郎「宇宙船がどうのこうのって…」

源内「(思い出して、)あ、で、そのホントは本能寺の変で亡くなる筈の信長を、自分たちが殺してしまったと勘違いして、蘇生させるために故郷の星へ連れ帰ってしまったンですね」

麟太郎「誰でえ、自分たちって？」

源内「あ、やってまった…」

場面転換。

## 9. ファントムゾーン

何もない空間（ピーター・ブルックじゃないよ）に送り込まれてしまった、  
竜馬ト以蔵。

上下もなく前後左右の感覚もない世界。  
一瞬のようでもあり永遠のようでもある世界。

以蔵「（不安）竜馬、ここはどこやろう？」竜

馬「まったく分からん」

以蔵「どいてこんなところに来てしもうたの  
かなあ？」

竜馬「……………」

以蔵「暗うて前も後ろも右も左もよう分から  
ん」

竜馬「……………」

以蔵「他のみんなはどいてンのかなあ？」

竜馬「ちっくと黙っちよってくれ。一所懸命  
考えちゅーんやき」

以蔵「すまん」

竜馬「（考えて、）…以蔵」

以蔵「うん？」

竜馬「ひょっとしたらえらいことが起こっち  
ゅーのかも知れんぞ」

以蔵「えらいこと？」

竜馬「わしらの想像を絶した物凄いことが起  
こっちゅーのかも知れんぞ」

以蔵「（期待して、）どんな？」

竜馬「まだ分からん」

以蔵「（がっかりして、）竜馬…」

竜馬「（懸命に考えている）うーん……………」

場面転換。

## 10. バイオメカ信長

江戸城城内、評定の間。

家茂の前に麟太郎ト源内。

家茂「何、異星人？ 信長は異星人と申す  
か!？」

麟太郎「ハッ」

家茂「で、その異星人とは何じゃ？」

麟太郎「他の星の人間でございます」

家茂「他の星の…？」

麟太郎「例えるなら、かぐや姫かと…」

家茂「何と!? 信長はかぐや姫か!？」

麟太郎「イエ、そうではなく、」

家茂「（思い付いて、）あ、かぐや姫が信長であったか!？」

麟太郎「そうでもなく…」

源内「（面倒になって、）タイタンと云う星からやってまいりました」

家茂「たいたん…？」

源内「ハイ」

家茂「たいたん…？」

源内「その星の人間が間違っって信長を殺したと思ひ込み、自らの星、タイタンに連れ帰り、蘇生させてしまったのです」

家茂「蘇生？ 生き返らせたと申すか？」

源内「ハイ」

麟太郎「その星には死んだ人間を蘇生させる技術があったとのコト」

家茂「うーん」

ト、懸命に理解しようとしている。

家茂「…しかし、何故、今？」

源内「タイタンから地球まで、空飛ぶ船で二百年の時が掛かります」

家茂「二百年!? （麟太郎に、）ならば、信長は今、幾つじゃ？」

麟太郎「（アタマの中で計算しながら、）三百…」

源内「332歳でございます」

家茂「三百三十二歳!？」

源内「ハイ」

家茂「しかし、その様には（見えなかったぞ）…」

源内「ですから、蘇生させた時にその身体の半分以上を機械仕掛けに、」

家茂「機械仕掛け!? からくり仕掛けのコトか？」

源内「ハイ。私たちは、バイオメカ信長と呼んでおります」

家茂「ばいおめか信長…？」

麟太郎「日本語だと何て云うンだい？」

源内「(ちょっと考えて、)…半生体兵器」

麟太郎「半生体兵器…？」

源内「ハイ」

麟太郎「……………」

家茂「からくり仕掛の信長かあ…」

麟太郎「で、上様。信長は上様に何と？」

家茂「将軍の座を明け渡せと」

麟太郎「将軍の座を!？」

家茂「余の代りにこの国を治めようと云う腹  
づもりらしい」

麟太郎「治めるンじゃねえ!! この国をテメ  
エのモンにしようって魂胆に決まったら  
あ!!」

源内「(麟太郎に、)独裁政治ってコトです  
か？」

麟太郎「そんなコトになったら、またこの国  
は大昔の不自由な国に戻っちまう」

家茂「しかし、この国の民四千万人が人質に  
なっていては…」

麟太郎「どうしたらいいンでえ…？」

家茂「…ところで海舟」

麟太郎「ハイ？」

家茂「そちは何故消えなんだ？」

麟太郎「(源内を示して、)この源内さんが  
引き留めて下さったンで、」

家茂「(源内を見詰めて、)何、この者が…」  
源内、説明が面倒なので、咄嗟にウソ  
を付く、

源内「手妻でございます!!」

家茂「何、お主、手妻遣いか？」

源内「左様でございます」

麟太郎「(源内に、)源内さん!!」

源内「(麟太郎に、)あとで、(説明するか  
ら)」

麟太郎「(理解して、家茂に、)左様、手妻  
遣いでございます」

家茂「(納得して、)そうか。手妻遣いか。  
その手妻でこの国を救えるといいのじゃが  
…」

源内「(家茂に、)実は私どもに策がありま

す」

家茂「策？」

源内「ハイ」

家茂「申してみよ」

源内「ハイ。私どもで信長の鉄甲船に忍び込み信長のクビを討ちます!!」

家茂「何と、その様なコトが、」

源内「海舟殿のご協力があれば、」

麟太郎「もちろんでございます!!」

家茂「しかし、信長のクビを討ってしまったのは、四千万人の民は、（戻って来ないのではないか?）」

源内「ご安心下さい。四千万人の民は寧ろ信長の妖術でこの世から消されております」

家茂「なるほど、信長を討てば、その妖術が解けて、民が戻って来ると」

源内「左様でございます」

家茂「しかし、お前たち二人では…」

麟太郎「二人ではありません。この源内にはあの世から人を呼び戻す力があります」

家茂「何と!？」

麟太郎「ただし、呼び戻せるのは全部で五人」

家茂「五人？」

麟太郎「私をこの世に止めて下さったンで、残りはあと四人」

家茂「あと四人？」

麟太郎「それにこの源内を加えた合計六人で信長を討ちます!!」

家茂「たった六人で信長が討てるのか!？」

麟太郎「アイツが居れば出来ますとも」

家茂「アイツ？」

麟太郎「坂本竜馬ですよ!!」

家茂「坂本竜馬!？」

場面転換。

#### 11. Why can't we be friends?

麟太郎の家。その一室。

竜馬ト以蔵VS総司ト歳三の激しい立ち回り。

麟太郎、各人の刃をかいくぐりながら

必死に止めている。

麟太郎「止めろ!! 止めろ!!」

が、興奮している四人の刃は一向に止まらない。

麟太郎、みんなに突き飛ばされながらも、

麟太郎「(絶叫)止めろ〜ッ!!」

その絶叫に、一瞬立ち止まる、竜馬、以蔵、総司、歳三。

麟太郎「ハア、ハア、ハア…」

が、一瞬後、激闘が再開される。

麟太郎、遂にキレて、

麟太郎「止めろッ!!」

ト、手にした木刀で四人を叩きのめして行く。

四人「痛ててててて…」

以蔵「(麟太郎に、) 何で止めるんや? コイツらは亀弥太の仇やよ」

竜馬「(麟太郎に、) 亀弥太は勝先生の弟子やろう!!」

麟太郎「(竜馬ト以蔵に、) 確かにそうだ。私も辛い。が、ココはこらえてくれ」

ト、アタマを下げる。

以蔵「先生がアタマを下げるコトはない。下げるのはコイツらだ」

歳三「(以蔵に、) 何でオレたちがオマエたちにアタマ下げなきゃいけないんだよ!!」

以蔵「オレたちの仲間を斬ったろ!!」

総司「(以蔵に、) 京の街を焼き払おうとしたからでしょ!!」

以蔵「(総司に、) あれは義挙や!!」

総司「叛乱でしょ!!」

以蔵「義挙!!」

総司「叛乱!!」

麟太郎「(絶叫)Why can't we be friends?」

ト、部屋中を走り回る。

四人、( ° 皿 ° )ポカーン…。

竜馬「(麟太郎に、) 勝先生どうした?」

麟太郎「Why can't we be friends!!」

四人「ハア?」

麟太郎「Why can't we be friends!! 何で仲良く出来ねえんだ? 何で友達になれねえんだ!!」

竜馬「友達?」

麟太郎「同じ、ニッポン人だろ!! 仲間だろ!! 何で仲良く出来ねえんだ?」

竜馬「(麟太郎に、)もう一度頼む」

麟太郎「何を?」

竜馬「ふあい…」

麟太郎「Why can't we be friends?」

竜馬「ふあい、きゃんと、うい、びい、ふれんず…?」

麟太郎「そう。仲良くなるおまじないだ」

竜馬「ふあい、きゃんと、うい、びい、ふれんず…」

麟太郎「(四人に、)分かってくれたかい?」

四人「ふあい、きゃんと、うい、びい、ふれんず…?」

麟太郎「そうだ。コレでオマエたち四人は友達だ!!」

四人「友達…」

麟太郎「(四人に、)で、オイラもオマエさんたちの友達だ」

竜馬「勝先生も?」

麟太郎「おう。だから、頼む。頼むからオイラの話聞いてくれ」

ト、四人に土下座する。

竜馬ト以蔵「(吃驚して、)勝先生…!!」

総司ト歳三「(も、吃驚して)勝殿…!!」

竜馬「(麟太郎に、)分かった。先生がそこまでおっしゃるなら…」

麟太郎「(総司ト歳三に、)沖田くんと土方くんは?」

総司「分かりました。幕府海軍奉行並の勝海舟先生がそこまでしてくださるなら…」

麟太郎「もうクビになっちまったけどな…」

以蔵「(総司に、)あ、それだってオマエらの所為だぞ!!」

竜馬「(以蔵に、)以蔵!! しばらく黙ってろ!! 勝先生がお話になる」

以蔵「（竜馬に、）すまん…」

麟太郎「（四人に、）実は、信じられん話かもしれないが、」

以蔵「何や？」

麟太郎「織田信長が現れて、上様に將軍の座を明け渡す様迫ってる」

四人「織田信長!？」

竜馬「織田信長ってあの織田信長やか？」

麟太郎「そうだ」

以蔵「（思わず、）信じられん…」

麟太郎「（以蔵に、）だから、信じられん話って云っただろ!!」

以蔵「すまん…」

総司「ボクは信じますよ!! 信長さんの話は別にしても、今、おかしなコトが起こっているコトは事実ですからね」

麟太郎「（思い当たって、以蔵に、）お、そう。オマエらココへ来る前にどこに居た？」

以蔵「（気が付いて、）あ、何か真っ暗で、」

麟太郎「（以蔵に、）お、それ魔界」

四人「魔界!？」

麟太郎「（四人に、）信長が作った魔界」

四人「信長が作った、魔界!？」

麟太郎「（四人に、）蘇った信長は妖術が使える様になったンだよ」

四人「妖術!？」

麟太郎「（四人に、）現に今このニッポンにはオレたち六人と上様しかいねえ」

四人「（吃驚して、）えええええッ!？」

歳三「（独り言）道理で誰も見掛けないと思っただ…」

竜馬、源内に気が付いて、

竜馬「（麟太郎に、）あの方は？」

麟太郎「（竜馬に、）星野源内さん。オレたちの救世主だ」

竜馬「救世主？」

麟太郎「（四人に、）この源内さんがオマエさんたちを魔界から呼び戻してくれたンだ。礼を云いな」

竜馬ト以蔵「（源内に、）ありがとうござった」

総司ト歳三「（源内に、）ありがとうございました」

源内「（四人に、）どういたしまして」

竜馬「（麟太郎に、）で、ワシらにどうしろと？」

麟太郎「（四人に、）ズバリ、オレたちで信長を討つッ!!」

四人「（驚いて、）えええええッ!!」

麟太郎「（四人に、）だからオメエさんたちを集めたんじゃねえか。流派は違えどオメエさんたちは剣豪だ。さすがの信長もオメエさんたちにはかなうめえ」

四人、それぞれに、自信はあるので、

四人「そりゃあまあ…」

以蔵「（麟太郎に、）で、どうやって討つんや？」

麟太郎「（源内に、）源内さん、（説明してやってくれ）」

源内「ハイ。先ず、気球に乗って信長の鉄甲船に忍び込みます」

以蔵「（源内に、）気球ってなんやか？」

源内「（以蔵に、）うーん。大きな風船です」

以蔵「風船!？」

源内「その大きな風船にカゴを付けて人間が乗り込み空に飛びます」

竜馬「乗ってみたい!!」

源内「（竜馬に、）みんなで行きましょう!!」

以蔵「みんなって新選組も一緒やか？」

麟太郎「（以蔵に、）みんな一緒だ。じゃなきゃ信長のクビは討てんッ!!」

竜馬「（以蔵に、）同盟や。ワシらと新選組の同盟や」

麟太郎「（竜馬に、）さすが、竜馬。良いコト云うな」

以蔵「なら、以竜総歳同盟だな」

総司「以竜総歳同盟？」

以蔵「（総司に、）以蔵、竜馬、総司、歳三の順ちや」

総司「（以蔵に、）イヤ、ココは、総歳竜以  
同盟に」

以蔵「（総司に、）総司、歳三、竜馬、以蔵  
か？ 何でワシが一番最後なんだ？」

総司「（以蔵に、）何となく…」

以蔵「（総司に、）何だと!!」

源内「（総司ト以蔵に、）まあまあ、ココは  
一つ、友達地球防衛軍、と云うコトで、ど  
うでしょう」

竜馬・以蔵・総司・歳三「友達地球防衛軍!？」

竜馬「（源内に、）えろうカッコええやない  
か!!」

源内「（竜馬に、）でしょ!!」

以蔵「（考えて、）友達地球防衛軍かあ…。  
まあ、ええかあ」

源内「（総司ト歳三に、）沖田さんと土方さ  
んは？」

総司「ボクは構いません。気に入りました」

歳三「私もです」

源内「（一同に、）それじゃあ、記念に写真  
でも撮りますか？」

以蔵「（源内に、）写真？」

源内「（以蔵に、）ピクチャーです」

以蔵「（独り言）ピクチャー…？」

源内「（一同に、）さあ、並んで、並んで」  
ト、一同を並ばせる。

以蔵、何も知らずに、

以蔵「（源内に、）オレは真ん中がええ」

源内「（以蔵に、）どうぞ、どうぞ」

前列に総司ト歳三。後列に竜馬ト以蔵  
ト麟太郎が並ぶ。

源内「（一同に、）今までの人生で一番楽し  
かった日のコトを思い出して下さい」

一同、その通りにする。

破顔一笑。

源内「（一同に、）ハイ。そのまま動かない  
で、十、数えます」

以蔵「ひとつ」

源内「（以蔵に、）動かない!! 数えるのは、  
私」

以蔵「（源内に、）申し訳ない…」

源内「（以蔵に、）動かない!!」

以蔵「（くしゃみ）」

一同「以蔵!!」

以蔵「すまん…」

以蔵、じっとする。

源内、十、数え終わって、

源内「（一同に、）ハイ。撮り終わりました」

一同「（源内に、）ありがとうございました」

竜馬「（以蔵に、）以蔵、真ん中は魂抜かれるがぞ!!」

以蔵「（吃驚して、）えええええッ!!」

麟太郎、竜馬、総司、歳三、源内、大笑いの中に、場面転換。

## 12. 気球大作戦

気球に乗っている一同。

麟太郎、竜馬、以蔵、総司、歳三、源内。

総司、カゴから身を乗り出して、下を見ながら、

総司「（歳三に、はしゃぎながら、）歳さん。凄  
い、凄  
い！ 江戸の街がドンドン小さくなる!!」

歳三「どれどれ」

ト、歳三も覗く。

歳三「（感動して、）おお、凄  
い眺めだなあ!!」

竜馬「（も、見て、）江戸の街は凄  
いのお。以蔵も見てみろ」

以蔵「（竜馬に、）高いところ苦手やき…」

竜馬「そうやったけ？」

麟太郎「（も、見ながら、）キレイな街じゃねえか。人っ子一人いねえってのが残念だけどよお」

源内「（一同に、）作戦を確認します」

一同、それぞれに返答して、源内の周りに集まる。

源内、鉄甲船の絵図面を示して、

源内「（一同に、）コレが、鉄甲船の絵図面

です」

一同「（それを見て、）おおッ!!」

などとそれぞれに感心する。

麟太郎「（感心して、）さすが、源内さんだな」

源内「説明します」

一同、真剣に聴く。

以蔵「（くしゃみ）」

一同「以蔵!!」

以蔵「（しゅん…）」

源内「では、先ず、気球を鉄甲船に横付けしたら、竜馬さん、以蔵さん、沖田さん、土方さんの四人が乗り込みます」

四人「（それぞれの返答）」

源内「四人でこの火薬庫に行ったら、それぞれの爆薬の導火線に火を付けて戻って来ます」

総司「猶予はどれくらいですか？」

源内「5分」

以蔵「ごふん？」

源内「あ、えーと、一時間が半時だから、半時の十二分の一です」

麟太郎「（以蔵に、）ちょんの間よ」

以蔵「おお、ちょんの間やか」

竜馬「（以蔵に、）分かったのか、このスケベ」

以蔵「あははははは（ト、照れ笑い）」

源内「（以蔵に、）シッ!! もうすぐです」

以蔵「（源内に、）ハイ」

源内「（一同に、）隠れてッ!!」

一同、カゴに身を伏せる。

気球が鉄甲船に近づく間。

一同「（息を殺して待つ）……………」

以蔵「（くしゃみ）」

一同「（声を殺して、）以蔵ッ!!」

以蔵「（しゅん）……………」

源内「（間合いを計って、）今ですッ!!」

竜馬、以蔵、総司、歳三「おうッ!!」

ト、カゴから鉄甲船に飛び移ろうとしてその姿を現した、その瞬間、目の前

に信長の姿を確認する。

四人「信長!？」

信長「(源内に、)源内!! 汝(うぬ)の考えなど、手に取るように分かるわい!!」

源内「しまったッ!!」

信長「それッ!!」

ト、次の瞬間、槍で気球を突く信長。  
プシューと空気の漏れる音を立てて気球が墜落して行く。

気球の一同「ウワワワワワ〜」

信長、落下して行く気球を確認して、

信長「愚か者めがッ!!」

場面転換。

### 13. 信長の逆襲

麟太郎の家。その一室。

麟太郎、竜馬、以蔵、総司、歳三、源内。

一同、それなりにケガしている。

云わば、ダイハード的な、

源内が五人に詫びている。

源内「申し訳ありませんでした。私の計画が甘すぎました!!」

以蔵「ワシがくしゃみしたき…」

総司「ボクが物見遊山でした…」

歳三「私もです…」

竜馬「誰の所為でもないみんなの所為や…」

麟太郎「(考え込んでいる)……………」

ト、外の気配に気が付いて、

麟太郎「ありゃ何でえ!？」

見ると、鉄甲船がゆっくりと動き出す。

麟太郎、縁側へ飛び出して、

一同、それに続く。

麟太郎「鉄甲船が動き出したッ!？」

総司「ホントだ!？」

歳三「(麟太郎に、)ありゃあ、どっちの角です？」

麟太郎「両国から浅草方面じゃねえか…」

五人「浅草!？」

麟太郎「まさか、信長のヤロウッ!？」

総司「あ、鉄甲船から何か降って来ました!？」

源内「(恐怖して、)爆弾…!？」

五人「爆弾!？」

一同、その激しい爆撃を見て、  
ヒューン、ヒューン、ヒューン…

一同「ああああッ!？」

浅草寺を中心に浅草の街が爆撃され、  
チュドーンッ!! チュドーンッ!! チ  
ュドーンッ!!

火に包まれる。ゴオーッ!!

麟太郎「(呆然)ああああッ!! 浅草寺が、  
浅草が、江戸の街が、

一同「燃えてる!!」

ゴオーッ、ゴオーッ、ゴオーッ…。  
場面転換。

#### 14. 家茂、死す!!

江戸城城内、評定の間。

家茂が信長にクビを押さえられている。

家茂「(苦しい)何をする!？」

信長「主まで謀反か? いい度胸よのオ」

家茂「謀反ではない。余が正義じゃ!!」

信長「何ィ!？」

家茂「明智光秀も謀反でなく、正義であった  
のだろう!!」

信長「歴史は勝利した者が作る。儂が勝てば、  
儂が正義!!」

家茂「ならば、余が勝てば、余が正義と認め  
るか？」

信長「戯け(たわけ)ッ!! 主が儂に勝てる  
ワケがなかろうッ!!」

ト、家茂を壁に叩き付ける!!

ドーンッ!!

家茂、背中を強打。苦しそう…。

家茂「ハア、ハア、ハア…」

信長「そのような病弱な身体でこのニッポン  
が治められるのか？」

家茂「それが余の運命(さだめ)!! 運命を  
生きる道筋もあるッ!!」

信長「世襲は辛いもう…」

家茂、刀を手に取り、  
家茂「この国はオマエには渡さんッ!!」  
ト、刀を構える。  
信長「主にこの儂が斬れるか？」  
家茂「(一大決心、)斬るッ!!」  
ト、斬り掛かる。  
信長、その刃を腕で受ける。  
キーンッ!!  
家茂「(驚いて、)何とッ!? 妖術かッ!？」  
信長「斬(ザン)ッ!!」  
ト、その腕を振り下ろす。  
家茂、真っ二つ。  
家茂「……………」  
信長「たわいも無い…」  
麟太郎、竜馬、以蔵、総司、歳三、源  
内、やって来て、  
六人「上様ッ!？」  
以蔵「(瞬間)テメエッ!!」  
ト、信長に斬り掛かる。  
信長、その刀を右腕で受け、左手の手  
刀で以蔵の胴を斬る。  
以蔵、慌てて、飛び退る(とびすさ  
る)。  
以蔵の胴から血がしたたり落ちる。  
以蔵、その血を押さえて、  
以蔵「何ィ!？」  
源内「(以蔵に、)腕そのモノが刃になっ  
てますッ!!」  
以蔵「上等じゃねえか!!」  
ト、再び向かって行くが、信長の両腕  
から放たれた気で吹っ飛ばされる。  
以蔵「ウワワワワッ!!」  
麟太郎「(竜馬、総司、歳三に、)いっぺん  
に掛かれッ!!」  
竜馬・総司・歳三「おうッ!!」  
ト、三方向からいっぺんに斬り掛かる  
が、全て躲されてしまう。  
竜馬・総司・歳三「!？」  
信長「それッ!!」  
ト、三人に向かって、気を放つッ!!

竜馬・総司・歳三「ウワワワワッ!!

ト、吹っ飛ぶ。

信長「トドメだ…」

ト、身構える。

その時、雷鳴。

信長「!!」

ト、その動きを止める。

竜馬・総司・歳三「……………」

信長「命拾いしたな…」

ト、立ち去る。

残された一同「……………」

瞬間後、麟太郎、家茂に駆け寄り、

麟太郎「（家茂を抱きかかえて、）上様、上様、上様ッ!!」

家茂「（やっと、）海舟、竜馬、以蔵、総司、歳三、源内、後は頼む…。ニッポンを救って…」

ト、言葉半ばにして、絶命。

麟太郎「（絶叫）上様ッ!!」

その様子を見守るしかない、一同。

一同「……………」

麟太郎「（さらに絶叫）上様ッ!!」

竜馬「……………」

場面転換。

#### 15. 竜馬ト家茂（回想）

江戸城、庭園。

竜馬ト家茂。

竜馬、ひれ伏して、

竜馬「私は、勝海舟先生の弟子であり、海軍塾で塾頭をしておりました、坂本竜馬と申します。一度、翔鶴丸の上で將軍様にはお目に掛かったコトがございます!!」

家茂「おお!! よく覚えておるぞ!! あんなに大はしゃぎして喜ぶ大人を、余は生まれて初めて見た!! そうか、海舟の…。竜馬、面を上げて顔を見せてくれ!!」

竜馬、顔を上げる。

竜馬「……………」

家茂「神戸海軍塾を廃止したり、海舟を蟄居

したり、余に力足らず、止めるコトが出来  
なんだ。そちらには済まぬコトをしたな…」

竜馬「…い、いえ…」

家茂「その後困ったであろう。今はどうして  
おるのだ？」

竜馬「ハイ。わしゃ、イヤ、私は、船と海が  
大好きでありまして、将来、自分らののでっ  
かい船を持ちまして、七つの海を越え、世  
界中の国と貿易をし、交わりたいと考え、  
今、その夢に向かって、わずかな一步を歩  
み出した所であります!!」

家茂「ほーッ!! 七つの海を越えて、世界の  
国へ…。途方もない夢だな。余は、そんな  
コト想像したコトもなかった…」

竜馬「…将軍様、この度の長州征伐の幕府海  
軍の総督に、勝先生をと、将軍様が希望さ  
れていると、伺いましたが、」

家茂「…確かに、余は希望し、海舟にはその  
旨伝わっておる筈」

竜馬「私は長い間勝先生のお側におり、いつ  
も先生とこの先のニッポンの在り方を話し  
合い続けてまいりました。恐れながら、勝  
先生はこの度の長州征伐には大反対であり  
ます!! その戦の指揮をと命ぜられては、  
さぞや勝先生は深く悩み苦しんでおられる  
筈。どうか、そのご命令を…」

家茂「戦を、余も望んではおらぬ。されど、  
余の力及ばず、不本意ながら、コトここに  
至ってしまった。至ってしまった以上は、  
戦いに出向いて行く我が家臣らのために、  
せめて一番有能な指揮官を付けてやるのが、  
余のなすべきコトと考える。でなければ…」

竜馬「長州も戦など望まず、民衆も諸藩も、  
ですから、何としても、この戦を止めるよ  
う、微力ながら、私はじめ多くの同志が命  
をかけて奔走しております!!」

家茂「戦など、同じ国の者同士が殺し合うな  
ど、誰が望むものか…。異国がニッポンを  
狙って来ている。ニッポンは、インドや清  
国の様にされないため、強い国家にならな

くてはならぬ!! 一橋や小栗らは、それは、幕府に反抗する諸侯を武力で制圧し、徳川の權威、威光を再び絶大なものにし、ニッポンを強く一つにまとめあげるコトと考えておる。だから、長州を征伐する。一方、一翁や海舟らは、徳川も一大名に立ち戻り、雄藩連合の政権を作ろうと説く。それで、強いニッポンが生まれるなら、それは、素晴らしいと思う。それが出来るのならば、余は、二百六十年余も長く続いた、この徳川幕府を、余の代で終わりにしてもよいと思っている…」

竜馬「!!」

家茂「しかし、不幸にも、今日に至るまで、すでに、あまりに多くの血が流されてしまった。その者たちの遺族らの感情からすれば、徳川が、一大名に戻るなどと虫のいいコトで許される筈もなかろう…。徳川を滅ぼしたいであろう。余は殺されてもかまわぬが…。余の大好きな一翁や海舟の命は、どうなる!? 長く仕えてくれた多くの徳川の家臣たちとその家族は、どうなるのか!？」

竜馬「家茂様。戦わず、徳川も滅ぼさずに、ニッポンが一つになれる新しい世を作りましょう!!」

家茂「…そんな夢が実現できたら、どんなにいいか…」

竜馬「出来ますッ!! きっと、出来るッ!!」

家茂「……………」

竜馬「(泣きながら、)どれも人間の為すコト!! 出来ない筈はない!! 出来ない筈はない!!」

ト、地面に拳を打ち続ける。

家茂「竜馬。心が熱いのう」

竜馬「……………」

家茂「今日は会えて嬉しかった」

竜馬「……………」

家茂「竜馬…」

竜馬「ハイッ!!」

家茂「本当にそんな夢が実現でき、そちとも、

長州の志士とも、友達として会えるようになったら、嬉しいものだな…」

竜馬「ハイッ!! その時は、家茂様と勝先生と一緒に、船で世界へ出掛けましょうッ!!」

家茂「…竜馬。海舟には、今しばらく蟄居していてくれと伝えておくコトにしよう」

ト、立ち去る。

竜馬「（泣きながら、）家茂様、ありがとうございますッ!!」

ト、再びひれ伏す。

やがて、現実に戻って、

竜馬、面を上げて、立ち上がり、

竜馬「…家茂様。必ず仇はとってみせますッ!!」

雷鳴。

場面転換。

## 16. 新たなる希望

麟太郎の家、その一室。

外は激しい雨。

麟太郎、竜馬、以蔵、総司、歳三、源内。

源内が、咸臨丸の絵図面を示して、懸命に説明している。

源内以外の一団「咸臨丸ッ!?!」

麟太郎「（源内に、）咸臨丸って、あの咸臨丸かい？」

源内「（麟太郎に、）そうです!! 勝先生と一緒にサンフランシスコに行った、あの咸臨丸です!!」

麟太郎「しかし、咸臨丸は…」

源内「ええ。酷使が祟り、疲弊が激しく故障が頻発していた蒸気機関を撤去して、今は、帆船になっています」

麟太郎「で、どうするンでえ？」

源内「改造して、飛ばしますッ!!」

源内以外の一団「飛ばすッ!?!」

麟太郎「どうやって？」

源内「その前にお願いがあります」

麟太郎「何でえ？ 焦れってえなあ。早く、

話な!!」

源内「…私の故郷も、私の家族も、信長の手によって崩壊しました…」

総司「(同情して、) そうだったの…」

歳三「ひでえ野郎だッ!!」

源内「そして、その故郷で信長は強大な力を手に入れ、その力で、再びこのニッポンを制覇しようとして戻って来たのです」

源内以外の一同「……………」

源内「信長が私の故郷で手に入れた力は、何というか…」

以蔵「妖術」

源内「そう。みなさんにとっては妖術か魔術と呼ぶ以外に呼びようのない不思議な力です」

以蔵「うん」

源内「で、私が、これから咸臨丸を改造して飛ばす力もみなさんにとっては妖術か魔術みたいなもんなンです」

麟太郎「うん、うん」

源内「私たちの世界にはルール、」

歳三「ルール？」

源内「あ、決まり事があって、」

歳三「あ、決まり事ね」

源内「その決まり事って云うのが、その時代のその土地にある技術しか使ってはいけないと云うモノなンです」

麟太郎「なるほど。で？」

源内「で、私は、鉄甲船に潜入するために気球を提案したンですが、」

総司「槍でブスってやられちゃいましたけどね」

源内「ハイ」

麟太郎「大体、あの鉄甲船は、何で浮いてるンだい？」

源内「反重力装置です」

源内以外の一同「反重力装置!？」

麟太郎「分かった!! 咸臨丸もその反重力装置で飛ばそうってンだろ!!」

源内「そうなンです。そうなンですが…」

麟太郎「何でえ？」

源内「この技術は今のニッポンにはない技術  
なンです」

麟太郎「（焦れたくて、）だから、何だっ  
てンだよ!？」

源内「（云い辛い）…だから、みなさんの記  
憶を消さなきゃならないンです」

総司「記憶を消す!？」

以蔵「やじゃ!! 絶対、イヤじゃ!! お花ちゃ  
ーん。忘れとうないッ!!」

竜馬「記憶を消すって全部やか？」

源内「イエ、信長が現れてからの、」

竜馬「（喰って、）ええよ。記憶に残ら  
いでもこの国が無事ならそれでええ」

源内「（感動して、）竜馬さん…」

竜馬「みんなもそれでええよな」

源内以外の一同、頷く。

源内「（感動して、）ありがとうございます  
ッ!! 私が不甲斐ないばかりに…」

麟太郎「オメエさんは一所懸命やってるよ」

源内「（泣き出す）わーんッ!!」

総司「（源内に、）泣き虫さんですか？」

源内「（泣きながら、）ハイ」

源内以外の一同、笑う。

麟太郎「で、その反重力装置ってのは、オ  
イラたちでも作れるのかい？」

源内「ハイ」

麟太郎「じゃあ、ちゃっちゃと作っちま  
おうぜ」

源内「ちゃっちゃとは出来ません」

竜馬「じゃ、一所懸命作るか？」

源内「ハイッ!!」

麟太郎「じゃあ、一所懸命、ちゃっちゃと  
作っちまおうぜッ!!」

一同「おうッ!!」

場面転換。

## 17. 反重力装置を作る

反重力装置を作る大変さを出演者一同  
の三味線の演奏で表現したいと思いま

す。

演奏、決まって、

麟太郎「咸臨丸、発進ッ!!」

音楽、カットイン。

“宇宙戦艦ヤマト”

踊る一同。

ダンス、決まって、

場面転換。

## 18. 潜入大作戦

咸臨丸内。その一室。

外は、豪雨。

麟太郎、竜馬、以蔵、総司、歳三、源内、作戦会議中。

源内「このまま雨に紛れて鉄甲船の上まで行きます」

総司「鉄甲船の真上ですか？」

源内「ハイ」

歳三「信長に見つかりませんか？」

源内「前は近付き過ぎて見つかってしまいましたが、今回はもう少し距離をとる上にこの雨です」

豪雨。

源内「それに、私が反重力装置を使うとは夢にも思っていないでしょう」

竜馬「それから？」

源内「この咸臨丸から縄ばしごを降ろして、」

総司「それで、潜入するワケですね」

源内「ハイ」

以蔵「それから？」

源内「後は、前回と同じ作戦です」

麟太郎「火薬庫に爆薬を仕掛けて、」

源内「イエ、今回は時限爆弾を使います」

源内以外の一同「時限爆弾!？」

総司「何ですか、それは？」

源内「ある時間になると爆発する爆薬です」

麟太郎「（感心して、）なるほどねえ…」

歳三「それも、」

源内「ええ、ルール違反です」

総司「良いンですか？」

源内「毒を食らわば皿までです」  
歳三「何か申し訳ないな…」  
源内「良いンです。モトはと云えば、私たちの所為ですから…」  
歳三「（感心して、）律儀ですねえ…」  
総司「それでも、もし、信長さんに見つかったら？」  
源内「私が、煙玉で煙幕を張りますから、その間にみなさんは、縄ばしごで咸臨丸に戻って下さい」  
以蔵「ソコは煙玉なンじゃな？」  
源内「煙幕はいつの時代にも役に立つンですよ」  
以蔵「（感心して、）ほうか」  
源内「鉄甲船が爆発して信長が死ねば、ニッポンももともとどおりに戻ります」  
以蔵「やけんど、何で信長は一人で来たんや？」  
源内「散々家臣や身内に裏切られて嫌気が差したんでしょう」  
総司「可哀相な人だ…」  
源内「自業自得です…」  
竜馬「ふあい、きゃんと、うい、びい、ふれんず？ 友達になれたらなあ…」  
以蔵「竜馬、なれるワケないろう!!」  
竜馬「やけんど、なれたらだ!!」  
麟太郎「さすが、竜馬。人間がでけえや」  
以蔵「じゃあ、ワシは小っちゃいのか？」  
麟太郎「小っちゃえじゃねえか!!」  
以蔵「確かに、その通りやき文句は云えん…」  
以蔵以外の一同、笑う。  
源内「（一同に、）シッ!!」  
一同、黙る。  
源内「そろそろ時間です!!」  
源内以外の一同「（緊張して、各々の返答）」  
源内「最終確認です!!」  
源内以外の一同「ハイ」  
源内「竜馬さん、以蔵さん、沖田さん、土方さんは、縄ばしごで私と一緒に鉄甲船へ」  
竜馬・以蔵・総司・歳三「ハイ」

源内「勝先生は、みんなが戻った時にすぐ発  
進出来る様に準備して待って下さい!!」

麟太郎「おう!!」

源内「行きますッ!!」

源内以外の一同「ハイッ!!」

雷鳴。

場面転換。

### 19. 鉄甲船の決戦!!

鉄甲船、その甲板。

豪雨の中、竜馬、以蔵、総司、歳三、  
源内が縄ばしごを伝って咸臨丸から鉄  
甲船の甲板に降りて来て、

源内「以蔵さんは、ココで見張りを」

以蔵「おう」

源内「竜馬さんと沖田さん、土方さんは、私  
と一緒に」

竜馬・総司・歳三「ハイ」

源内「行きますよッ!!」

以蔵「（源内に、）どれくらいじゃ？」

源内「ちょんの間ですよ」

以蔵「おう。ちょんの間、ちょんの間」

竜馬、総司、歳三、源内、火薬庫へ。

以蔵「（一同に、）頼むぞッ!!」

雷鳴。

以蔵「（殺気を感じて、）誰じゃ!？」

信長、現れて、

信長「よう忍び込めたのう？」

以蔵「現れたな!!」

信長「何をしておる？」

以蔵「問答無用ッ!!」

ト、斬り掛かる。

躲す、信長。

信長「何をしておる？ と訊いておる？」

以蔵「やき、問答無用じゃ!!」

ト、再び、斬り掛かる。

信長、その刀を右手で掴む。

むんずッ!!

以蔵「何ッ!？」

信長「懲りぬ男よ」

ト、左手で以蔵の胴体を右から左へ切り裂く。

ズバッ!!

以蔵、たまらず、後ずさり。

ズザザザザッ!!

以蔵の刀は、信長の右手に残ったまま。

以蔵「ちきしょうッ!!」

ト、素手で構える。

以蔵「……………」

信長「汝（うぬ）が刃で死ぬがよいッ!!」

ト、以蔵の刀を持ち替え、上段から、切り下ろす。

以蔵、間一髪、それを躲す。

以蔵「あぶない、あぶない…」

信長「やるな…」

以蔵「やるさ、土佐の人斬り以蔵だッ!!」

信長「ならば、この信長。斬ってみィッ!!」

ト、以蔵に刀を投返す。

以蔵、それを受け取って、

以蔵「貰ったあッ!!」

ト、突きからの切り上げ、

信長、それを躲し、以蔵に、正拳突き。

その拳は以蔵の腹部を貫くッ!!

ズバッ!!

以蔵「グハッ!!」

信長「人斬られ以蔵よのう…。ハッハッハッ…」

以蔵「…まだまだ…」

ト、言葉とは裏腹に崩れ落ちる。

信長「……………」

以蔵「…まだまだ…」

信長、以蔵の刀を手に取り、

信長「トドメッ!!」

ト、以蔵の首を刎ねる。

竜馬、総司、歳三、源内、戻って来て、

竜馬「（以蔵の無残な姿を見付けて、）以蔵ッ!!」

信長「汝らァ…」

竜馬、抜刀ッ!!

竜馬「（信長に、）ようも以蔵をッ!!」

源内「(竜馬に、)竜馬さんッ!! 時間がないッ!!」

信長「源内ッ(何をしたッ)!!」

源内、竜馬、総司、歳三に、

源内「咸臨丸に戻ってッ!!」

信長、頭上の咸臨丸に気が付いて、

信長「(源内に、)源内ッ!! 反重力装置、使ったなッ!!」

源内「(信長に、)背に腹はかえられないッ!! アンタを倒すには、形振り構っちゃられないンだよッ!!」

信長「ならば農もじゃッ!!」

ト、その両掌を咸臨丸に向ける。

源内「何ッ!?!」

信長の掌からエネルギー波が、

ビビューンッ!!

エネルギー波はあつと言う間に咸臨丸を包む。

ブバッ!!

続く、大爆発ッ!!

ズガンンッ!!

源内「(驚愕)ああッ!!」

竜馬「勝先生〜ッ!!」

総司・歳三「(呆然)……………」

信長、竜馬、総司、歳三、源内に向き直って、

信長「次は、汝らの番じゃ…」

源内「(竜馬、総司、歳三に、)時間がないッ!! 飛び降りてッ!!」

竜馬・総司・歳三「!?!」

源内「(三人に、)江戸城の屋根に飛び降りてッ!!」

竜馬「(源内に、)しかし…」

源内「早くッ!!」

総司「(歳三に、)歳さんッ!!」

歳三「(総司に、)おうッ!!」

ト、二人、鉄甲船から、江戸城の屋根の上に飛び降りる。

源内「(竜馬に、)竜馬さんッ!! 早くッ!!」

竜馬「(決心して、)分かったッ!!」

ト、飛び降りる。

源内「（信長に、）さらば父上ッ!!」

ト、煙玉。

ドーンッ!!

モクモクモク…。

源内の姿は既に江戸城の屋根へ。

信長、煙の中からその姿を現して、火薬庫の爆発を目の当たりにする。

信長「何ッ!？」

次の瞬間、大爆発する鉄甲船ッ!!

ドガガンッ!!

場面転換。

## 20. 最終決戦

江戸城、屋根の上。

降り続く雨。

時々の雷鳴。

一大事業を成し遂げ、呆然ト座り込んでいる、竜馬、総司、歳三、源内。

竜馬、総司、歳三、源内「……………」

総司「（歳三に、）…やりましたね」

歳三「おお、やった、やった!!」

竜馬「（誰にともなく、）やけど、以蔵も勝先生も死んでしもうた…」

源内「…申し訳ありません」

竜馬、突然、立ち上がり、

竜馬「（大声で、）以蔵～ッ!!」

ト、呼んでみる。

総司「竜馬さん…」

竜馬「（大声で、）勝先生～ッ!!」

総司・歳三・源内「……………」

麟太郎「あいよ」

ト、現れる。

竜馬「（驚いて、）勝先生ッ!？」

総司・歳三「（も、吃驚して、）海舟殿ッ!？」

麟太郎「（一同に、）源内さんに貰った、パラ、パラ、パラ…」

源内「パラシュート」

麟太郎「そう。そのパラシュートだったので助かった」

竜馬、麟太郎に抱きついて、

竜馬「（泣きながら、）よかったあ！ よかったあ！」

麟太郎「（竜馬に、）心配させちゃったな」

竜馬「（泣きながら、）ホントやよッ!!」

麟太郎、以蔵の姿がないのに気が付いて、

麟太郎「（竜馬に、努めて、明るく、）以蔵の野郎は極楽に行きやがったかッ!!」

竜馬「（頷く）……………」

麟太郎「（努めて、明るく、）アイツのこったあ、やっぱり、地獄だな…」

ト、以蔵との日々を思い出し、

麟太郎「（泣きながら、）以蔵…。ありがとうよ…」

竜馬「勝先生…」

総司「（気分を変えようと思って、）まだ、江戸の街に人は戻ってきませんね」

歳三「（も、江戸の街を見回して、）そういやあ、そうだな…」

総司「（源内に、）どうなってるの源内さん？」

源内「（ピンと来て、）まさか…」

信長、現れて、

信長「儂が死ななきゃ誰も戻って来られんッ!!」

麟太郎・竜馬・総司・歳三「信長ッ!?!」

麟太郎「生きてやがったのかッ!?!」

信長「（源内に、）…詰めが甘いのう」

源内「（悔しい）クッ!!」

竜馬「以蔵の仇ッ!!」

ト、抜刀して向かって行く。

が、信長が放った衝撃波で吹っ飛ばされる。

竜馬「ウワワワワッ!!」

麟太郎「竜馬ッ!!」

総司ト歳三も抜刀して構えている。

歳三「（源内に、）どうすりゃいい？」

源内「（懸命に考える）うーん…」

雷鳴。

源内「（思い付いて、）そうだ!! カミナリだッ!!」

麟太郎・竜馬・総司・歳三「カミナリッ!？」

源内「私の身体を通してカミナリのエネルギーを放射すれば、オーバーロードするかもッ!!」

麟太郎「何を云ってるのか分からん!？」

源内「エレキテルですッ!!」

麟太郎「おお、エレキテルかッ!!」

源内「エレキテルで過大負荷を掛けて信長の機械仕掛けの身体を破壊するンですッ!!」

竜馬「（源内に、）で、どうすりゃええんやか？」

源内「避雷針があれば…」

竜馬「ひらいしん？」

源内「（閃いて）! 信長の身体に刀を突き刺せますか？」

総司「ボクなら…」

歳三「総司ッ!？」

総司「歳さん、ボクには三段突きがあります!!」

歳三「そりゃあ、そうだが…」

総司「大丈夫ですよ!!」

歳三「だったら、オレが露払いしてやるッ!!」

総司「お願いします!!」

竜馬「（総司に、）オレもやるぜよッ!!」

総司「竜馬さん…」

竜馬「（総司に、）友達やろ」

総司「ハイ!!」

歳三「（竜馬に、）行くぞ、竜馬ッ!!」

竜馬「ハイ、歳さんッ!!」

竜馬ト歳三「ウオオオオオッ!!」

ト、信長に突っ込んで行く。

続く、総司。

信長、その衝撃波で竜馬ト歳三を吹っ飛ばす。

その一瞬の隙に総司の三段突き。

最後の突きが信長の胸を捉える。

グサッ!!

信長「ウグッ!!」

総司、源内を振り返って、  
総司「（源内に、）今ですッ!!」

源内「ハイッ!!」

ト、自らの身体にカミナリを呼び込む。  
が、その瞬間に信長は、胸の菊一文字  
を抜き、返す刀で総司を斬るッ!!

総司「グワッ!!」

続く、血飛沫ッ!!

歳三「（気が付いて、）総司ッ!!」

総司「…歳さん」

歳三「総司ッ!!」

総司「グハッ!!」

ト、吐血。

その血が信長の目に掛かる。

信長、思わず、目を拭う。

総司、その信長の腕を押さえ込む。

信長「（総司に、）離せッ!!」

総司「（歳三に、）歳さんッ!! 刺してッ!!

ボクごと刺してッ!!」

歳三「総司ッ!!」

総司「早くッ!!」

歳三「そんなコト出来るワケないだろッ!!」

総司「石田散薬呑めば治りますよッ!!」

歳三「治ンねえよッ!!」

信長「離せッ!!」

総司「歳さん、早くッ!!」

歳三「（唸っている）ウウウウウッ!!」

総司「早くッ!!」

信長「離せッ!!」

総司「歳さんッ!!」

歳三「（決断して、）ウオオオオオッ!!」

ト、突っ込んで行く。

歳三の刀が総司の身体を貫き、信長の  
身体まで到達する。

総司「ウグッ!!」

信長「!!」

総司「（源内に、）源内さん…」

源内「ハイッ!! そりゃあッ!!」

ト、自身の身体に集めたカミナリのエ  
ネルギーを総司ト信長を貫いたその刀

に放出する。

ビュイーンッ!!

総司の身体が燃え上がるッ!!

ボウッ!!

歳三「総司ッ!!」

やがて、そのエレクトリックエネルギーが信長の全身を包む。

信長「ウワワワワッ!!」

やがて、信長、オーバーロードして、その動きを止める。

竜馬「(同時に、)以蔵の仇ッ!!」

歳三「(同時に、)総司の仇ッ!!」

ト、信長に一太刀浴びせるッ!!

ズバッ!! ズバッ!!

ゆっくり崩れ落ちる、信長。

ガシャーンッ!!

竜馬「……………」

歳三、総司を抱き起こして、

歳三「総司ッ!!」

総司「…歳さん」

歳三「何だ？」

総司「金平糖…」

歳三「あるぞ、いくらでもあるぞ」

ト、懐から金平糖の包みを出して、

歳三「コレ食べて元気だせッ!!」

ト、その一粒を総司の口に持って行く。

総司、それを口にして、

総司「ありがとう…歳さん…楽しかった…」

ト、絶命。

歳三「(絶叫)総司ッ!!」

竜馬、慟哭。

竜馬「ウワワワワッ!!」

見詰めるしかない、麟太郎、源内。

麟太郎「……………」

源内「……………」

竜馬、麟太郎、歳三、源内の悲しみの中にゆっくりと暗転。

## 21. 竜馬暗殺

暗転の中に、「ええじゃないか、ええ

じゃないか、ええじゃないか」の声。  
1867年。慶応三年十一月十五日、この日は竜馬満三十二歳の誕生日であった。  
午後八時頃。  
京都。近江屋。  
暗闇に声。

声「拙者は、十津川郷士であります、坂本竜馬先生が御在宿ならぜひお目に掛かりたい」

照明が戻って来ると、近江屋の一室で書状を読んでいる竜馬の姿が現れる。その時、襖がガラッと開いて、暗殺者が飛び込んで来る。

竜馬が振り返った時には、暗殺者の刃は、既に竜馬の右こめかみを切り裂いている。

竜馬、振り返り、左手で、背後の刀掛けにある刀に手を延ばす。

が、この時、暗殺者の刀は竜馬の背中を右肩口から袈裟斬り。

竜馬、刀を取り、その頭上で抜刀しようとするが、その鞘の真ん中に暗殺者の刃が食い込み、さらに、その勢いに乗って、暗殺者の刃は、竜馬の脳天に食い込む。

竜馬の脳天から血飛沫ッ!!

竜馬、三分の二程、刀を抜きかけたところで、前につんのめる。

暗殺者、無言で竜馬を見詰めている。

暗殺者「……………」

「ええじゃないか」の声が続いている。やがて、暗殺者、去る。

しばらくして、竜馬、起き上がり、抜刀してからあぐらをかき、その刃に自身の顔を映して、

竜馬「残念だった…」

ト、ゆっくりと前のめりに倒れて行く。竜馬、死す。

「ええじゃないか」の声、盛り上がって、ゆっくりと暗転。

## 22. 竜馬の夢。

暗闇の中から声がする。

家茂「おーい！ 竜馬」

以蔵「おーい！ 竜馬」

総司「おーい！ 竜馬」

歳三「おーい！ 竜馬」

麟太郎「おーい！ 竜馬」

全員「おーい！ 竜馬」

音楽カットイン。

“復活”（ザ・テンプターズ）

ト、同時に、照明もカットイン。

一同は、件の写真の位置に居る。

夢だから、家茂も居る。

やがて、竜馬も復活し、スローモーションで自分の位置へ。

竜馬、決まったところへ源内現れて、

源内「（一同に、）今までの人生で一番楽しかった日のコトを思い出して下さいッ!!」

一同、破顔一笑で、

一同「ふあい、きゃんと、うい、びい、ふれんず？」

音楽カットイン。

“Way can't we be friends?”

唄い踊る一同。

いつの間にか、信長も、

やがて、竜馬の夢からカーテンコールへ。

おしまい。

2018/06/05

2021/01/13 修正

□ 作者連絡先・kiyo-u@kb3.so-net.ne.jp

## 資料

「おーい！ 竜馬」

（原作 / 武田鉄矢・作画 / 小山ゆう）他、多数の資料を参考引用させていただきました。感謝！ 感謝！ 感謝！